



## 通訳心得<sup>[1]</sup>

関川富士子  
ベルリン日独センター語学研修部長  
aiic 会議通訳者

これから三回の勉強会では逐次通訳の練習をしますので、最初に「逐次通訳の心得」について少しお話しします。「通訳心得」というと非常に大袈裟に聞こえますけれども、「通訳」も職業なので、それなりの「心得」があっても当然でしょう。

### 職業人としての心得

まず、あらゆる職業に共通する心得があります。

それはプロ意識（Professionalität）です。ともかくお金をいただいて通訳をするのですから、いただいたお金に見合う分の仕事はしなければなりません。寝不足で耳が聞こえないとか、二日酔いで集中力がないとか、風邪をひいて体力が低下しているというのはお金を支払うクライアントに何等責任のないことです。下手な通訳の言い訳にはなりません。自分の体調を管理するのもプロ意識のひとつです。また「忙しくて準備不足」というのもクライアントの責任ではなく、あくまでも仕事を引き受ける通訳者の時間管理能力の問題です。準備をする時間がなければ、準備をしなくともできる範囲の仕事しか引き受けられない、準備を要する仕事は断る、これがプロフェッショナルリティでしょう。

体調管理と時間管理のほかにプロ意識として挙げておきたいのが時間厳守（厳切厳守、納入日厳守、Pünktlichkeit）、社会人としての常識（挨拶、敬語、TPO）、信頼性（確実性、Zuverlässigkeit）、生涯学習をする意欲（lebenslanges Lernen）です。

ここで少し脱線しますが、お金を取らなければプロではないのか、ということを考えてみましょう。語学ができる人は、「ちょっと手伝ってね」といったノリで通訳を頼まれることがあると思います。実際、私自身の初めての通訳の経験は中学生か高校生頃、父のお供でついていったレセプションの席で、そこにいらしたお客様同士の会話を通訳したことでした。もちろんプロ意識など爪の先ほどもありませんでしたけれども、後でお客様方に感謝されて嬉しかったのを覚えています。

数年前のことですが、日本のある有名な文化人（仮にA先生としておきましょう）が欧州遊説の旅に來られました。旅費、滞在費等は日本のある財団が負担していたようですが、各地での講演会などの企画、実施は現地のさまざまな機関が担当していました。旅程の最後にはテレビでドイツ人と対談する企画があり、これは同時通訳で行なうので「関川さん、お願いします」とテレビ局から呼ばれ、私は相場の報酬をいただいて同時通訳をすることになりました。A先生の一行に合流したところ、既に通訳者が一人ついていらっしゃいました。その方は「自分は地元のオーガナイザに頼まれて、ボランティアで通訳している」と言われました。ところが、スタジオのセッティングが始まると、A先生は「あの人（つまり、ボランティア通訳者）に部屋から出てもらってくれ！」と語気も荒いのです。ボランティ

A通訳者は驚き、悲しみ、怒りました。後で一行の別の方に伺ったところでは、前日までの講演会等がまともに通訳されたことが無く、それをA先生も感じとられていて、今回の欧州旅行が失敗であったと大変落ち込んでいらしたということでした。

なぜ、私がここでこのような話しをしているかということ、たとえお金をいただかなくとも、「私は通訳者です」と言って人前に出せば、相手はプロの仕事を期待していることを皆様に分かっていただきたいからです。「ボランティアだからプロほどできなくても良い／あまり上手にできなくても良い」という論理は通りません。A先生には伝えたいメッセージがあり、日本の財団と各地の機関が尽力してことを進めてきて、その一連の鎖の最期の輪である通訳者で躓いてメッセージが何ひとつ伝わらなかったというのでは余りにも悲しすぎます。そのメッセージを聞きたくて集まってきた聴衆に対しても失礼です。

地元のオーガナイザに頼まれ、ボランティアで通訳された方は親切心でなさっておられたのでしょう。でも、この例の場合、それは正しくない親切だったといえます。たとえば交通事故の現場に居合わせて、そこで大怪我した人やその身内の方々と救急隊員の意思疎通が巧くいっていないことに気づいた場合は親切心で通訳すべきでしょう。「私はプロの通訳者ではないからお手伝いしません」とか、「私はプロの通訳者ですからタダでは通訳できません」とか、「医学用語の勉強をしてから出直してきます」では困ります。しかし、何某かの組織や機関が席を設け、そこで「ボランティア通訳」を依頼するのは感心しませんし、私たちとしても依頼されたら断る気概をもつべきと思います。

## 通訳者としての心得

では、通訳者としての特別の「心得」とはなんでしょう。それは、守秘義務です。これは翻訳者に関しても言えることです。

さて、この勉強会では向こう三回は逐次通訳の練習をいたしますが、ここで逐次通訳と同時通訳の違いを考えてみましょう。同時通訳の場合、通訳者は話者（話し手）の発言と同時に通訳を始め、話者より数秒遅れる程度で訳し終えます。逐次通訳は話者の発言を区切って訳していきます。ワンセンテンス（文）毎の場合もあれば数センテンス毎の場合もあり、数分毎の場合もあります。この区切りをどこに入れるかを決めるのはあくまでも話者であり、通訳者ではありません。話者のなかには興に乗ると5分ぐらい纏めて話す人もいます。そこで通訳者が自分のメモリー（記憶力）が一杯になったからといって割って入るのはタブーです。逐次通訳者の心得その1は「中断しない」、その2は「メモを取る」ことです。一応20分間は一気に訳出できるように記憶力とメモ取りの練習はしておいてください。私がプロの通訳者として仕事をようになった時、最初に大先輩に言われたのが「必ずメモ帳とペンと替えペンを用意しておくこと」でした。

なかには「こんにちは」とひとこと言っただけで話しを止め、「通訳者さん、どうぞ」と訳出を促す話者もいます。「よろしく願います」とか「ま、それでは」だけを通訳する場合もあるでしょう。これはこれで、きちんと訳出しなければなりません。

逐次通訳と同時通訳のもうひとつの違いは、逐次通訳者は人前に出るが、同時通訳者はブースのなかに隠れている、ということです。ブースの種類や場所にもよりますが、たとえばベルリンの国際会議センター（ICC）のブースは天井裏のようなところにあり、どんな格好で通訳していても、同僚の通訳者以外の目にはとまりません。それに引き替え逐次通訳者は

- ・ アテンド通訳、随行通訳（Begleitdolmetschen）
- ・ 企業視察（Dolmetschen für *technical visit*）
- ・ 法廷通訳（Gerichtsdolmetschen）

- ・ 商談通訳 (Gesprächs- / Verhandlungsdolmetschen)
- ・ 式典通訳 (Dolmetschen von Begrüßungen und Ansprachen)
- ・ 講演通訳、レクチャー通訳 (Vortragsdolmetschen)

などいずれの場合も話し手と聞き手の間に位置することになりますから、どんな格好でもいい、というわけにはいきません。電話通訳 (Telefondolmetschen) の場合でさえ、どちらかの電話のある場所に赴くことが多いのです。したがって、身だしなみにも気をつけなくてはなりません。これは「プロ意識」のなかの「社会人としての常識」に当たると思います。たとえば服装ですけれども、TPOを考えた服装、清潔でホツレやシミのないもの、靴が磨いてあること、などと挙げていけば「何を分かり切ったことを」と思われる方もいらっしゃるでしょう。でも、現実には私は信じられないような例を見てきているのです。たとえばパーティ席上でご挨拶を通訳する女性通訳者が招待客よりも華やかなロングドレスをお召しになっているのを。あるいは政治家の通訳に呼ばれた通訳者がジョギングウェアで来られたのを。あるいは食べこぼしのついた衣装をお召しの方、爪が真っ黒に汚れている方…。そしてまた、前屈みになる度に長い髪の毛がばさばさと机の上にかかる通訳者 (なにを隠そう、最後の例は私です。立ったままの通訳の時は問題なかったのですけれども、途中から座っての通訳になり、バレッタを持っていなかったので大変な思いをしました)。もちろん、髪だって清潔でなければいけません。フケだらけだったり、幽霊のように顔にかかっているはいけません。また、香りのきつい香水も考え物です (とくに狭いブースのなかや、食事の席では香水は厳禁です)。

TPOを考えた服装というのは、たとえば女性通訳者の場合、パーティやレセプションで通訳する際は会場の雰囲気や壊すようなビジネススーツや大型書類鞆も困りますし、臨機応変に対応できないようなロングドレスでも困ります。また、通訳者は黒子ですので、上述の例のようにお客様よりも華やかになっては失格です。建設現場や工場などの視察通訳でハイヒールにミニスカートでこられても困ります。だからと言ってトレーニングパンツというわけにもいきません。随行する相手はほとんどの場合ビジネススーツの殿方なので、ある程度のバランス感覚は必要です。

「通訳は黒子」というのは服装の問題だけではありません。話し手が話している間は中断しない、というお話しをしましたが、この心得もここに含まれます。あるいは一緒にお食事する場合、良識ある大人として周囲の方が何を召し上がるかみて、それに合わせます。自分がフルコースを食べたくとも、他の方々がオードブルとメインディッシュしか注文なさらない場合は、それに合わせます。また、式典通訳や講演通訳の場合は、話者より前に出るようなことはいたしません。

しかし、黒子として最もしてはいけないことは、話者が話してもいないことを勝手に付け足すことです。もちろん、日本の方が「昭和 45 年に」と言われときに「im 45. Jahr der Shōwa-Ära」と訳すのは失格で、この場合「1970」と訳すのは出すぎたまねではなく、これが普通の訳です。しかし、ここで「1970, als die Weltausstellung in Ōsaka stattfand」と付け足すのは——万博の話をしている時は別として——いけません。あるいはまた、ドイツの話者が「総選挙後に省庁変遷があったために業務が滞っています」と話したとしましょう。それを聞いた日本の方が「えっ？ドイツでは総選挙の度に省庁が変わるのですか？」と尋ねたとしましょう。そこで通訳者がながながと自分の知識をひけらかして答えてはいけません。その質問をそのままドイツの方に返さなくてはなりません。<sup>[2]</sup> ただし、日本とドイツのシステムの違いから生じる誤解があり、それが原因で会話がスムーズに進まないことに気づいた場合、それとなくリードして差し上げるのも通訳者の役割です。

TPOは服装のことだけでなく、TPOを考えた訳をすることも心がけたいものです。大分前のことですが、日独学生大会が同時通訳つきで開催されたことがあり、先輩の会議通訳者たちが奮闘していらっしゃいました。そこで気がついたのが、訳は完璧でも、なにかチクハグしていることでした。それは、ドイツの学生さんが「du / ihr」で話しているのに、日本人の学生さんの発言は通訳者を通すと「Sie」になっていたからでした。そうすると、なんだか距離を置いているように聞こえてしまうのです。

私もコール首相（当時）と中曽根総理の逐次通訳をさせていただいた時に、中曽根総理の発言を「Sie」で訳したところ、コール首相がぐっと身を乗り出されて「Wir duzen uns.」と言われたことがありました。大人になってからドイツ語を学んだ私たち日本人は「Sie」のほうが丁寧だと思いがちですが、ケースバイケースで対応しなければならない、ということです。

別の例ですが、たとえば日本から来られた高齢の紳士が「本日は誠に結構なお料理をご馳走になりまして」とご挨拶をされたことがあります。これを訳された方のドイツ語は「Heute hamwa gut gegessen」と聞こえたのです。これでは話し手に対して大変に失礼です。職業人としての心得、あるいは常識と申しましょうか、日本語には日本語の待遇表現があり、ドイツ語にはドイツ語の待遇表現があります。どちらもきちんとマスターしておいてください。

通訳の際にもうひとつ肝に命じておきたいのは、聞きやすい訳です。通訳者が相手にしている人（聞き手）は耳から情報を収集しているのですから、漢語を羅列した難しい文章よりも和語を中心とした文章のほうがフォローしやすいでしょう。また、やたらと専門用語を用いるのも場合によっては逆効果です。聞き手が専門家かどうかによって専門用語を用いるか、もっと噛み砕いて説明するか考えましょう。<sup>[3]</sup> 簡単な例では「Bundestag」を「連邦議会」と訳す場合が良い時であれば、「ドイツの議会」としたほうが良い場合もある、ということです。

また、同音異義語にも気をつけましょう。たとえば話し手が「書ではコテンが大事です」と言われた場合、通訳者が一瞬「古典」なのか「個展」なのか迷ってしまふこともあるでしょう。同様に、通訳者としても聞き手に同じような戸惑いをもたせないように注意しないといけなないのです。

さて、プロ意識のなかで信頼性（確実性、Zuverlässigkeit）という言葉挙げましたが、これには時間を守る、正当な報酬を計上する、といったことのほかに、お客様に安心感をもっていただく、ということも入ります。つまり、信頼していただけるように正しく通訳をすることは言わずもがなですが、もし話し手の言っている内容が分からなかったらどうするか、あるいは単語をど忘れしてしまったらどうするか、といった問題です。前者の場合、逐次通訳だったら聞き返すことも可能ですし、場合によっては必要でしょう。でも、最初から最後まで聞き返していたのでは自分の勉強不足、準備不足を宣伝するようなものですし、話し手も聞き手も通訳者に対して「大丈夫かな」と不安感を抱くことになるでしょう。後者の場合は別の単語で言い換えるとか、あるいは堂々と辞書をひくとか、道はいくらでもあります。そして、重要なのはあくまで堂々と行なうこと。当たり前のような顔をして辞書をひけば「通訳さんでも分からないことがあるのか」程度の反応で済みますが、こそこそしていると「大丈夫かいな」になってしまいます。同様のことが準備の段階でも言えます。お客様に資料をお願いするのはプロとして当然ですが、そこで「資料が無かったら通訳できません!」「通訳できなくても責任とりませんよ!」とヒステリックに騒いでは不安感を煽るようなものです。資料の必要性を冷静に説明し、無ければ無いなりに最前を尽くします、と言うのがプロです。

## まとめ

それでは、本日挙げたキーワード（心得）を列挙してみます。今後皆様がお仕事なされる上でご参考になれば幸いです。

### 職業人としての心得 = プロ意識

体調管理

時間管理能力

時間厳守



社会人としての常識  
信頼性  
生涯学習をする意欲

### 通訳者としての心得

守秘義務  
話し手を中断しない \*  
メモを取る \*  
身だしなみ \*  
黒子に徹する \*  
TPOを考えて訳する  
聞きやすい訳を心がける  
お客様に安心感を与える／不安にさせない

\* 特に逐次通訳の場合

- 
1. ベルリン日独センター主宰の「日独通訳勉強会」の講義用に準備した原稿（2000年8月29日）
  2. 私がまだ学生アルバイト通訳だったころのエピソードです。  
ドイツ人演奏家「Wir kommen mit einem Quartett」  
私「カルテットで来ます」  
日本人音楽事務所「カルテットって、何人ですか」  
私「Wie viele spielen in einem Quartett?」  
ドイツ人演奏家「Vier, natürlich」  
私「四人です」  
これは、無心で通訳していたために本当に「カルテットが四人」ということを忘れていたためにこうなってしまったのです。  
この場合は、通訳者として最初から「四人です」と答えても良かったのですが、話し手に質問を返したことも間違いではありません。
  3. 一度、日本人政治家がドイツの廃棄物焼却炉を視察された際に通訳させていただいたことがあります。用語のひとつが「Konverter」で、大きなドラム缶のようなものが回転しながら中の物質を転換する装置でした。辞書にあったように「転換炉」と訳しました。長いレクチャーの後で日本人政治家が質問されました。「その回転炉だけだね、(…)」。どうやら「転換」ということばが「回転」として記憶に残ってしまい、「回転する炉のなかでなにか起こっているのか分からない」といった状態だったようです。通訳者としては「転換」の意味を噛み砕いて訳すべきだったと後で反省しました。